

一名除蝗
錄云

農家調寶記附錄
完

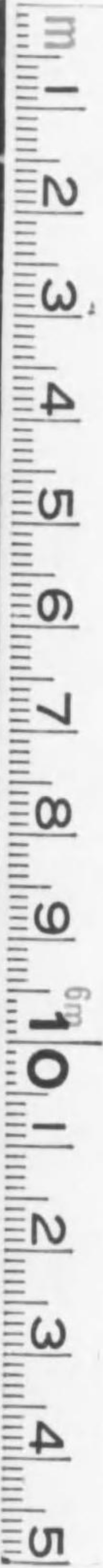
特279

特279-265



1200501132177

第一千百十四號



始



大藏永常著

江戸横山街
書肆五巖堂

農家調寶記附録全 一名除蝗録

此書ハ田圃蝗生ハる時油とてまみやくふまゝの法方とて教く
記し且氣候の満油の論蝗の種類もまてまゝ著之け書と見てけを
おぼたたとびらやうのふれを蝗つたるとしてけりてけりてけりてけり
よひてらるやうとてけりてけりてけりてけりてけりてけりてけりてけり

特279
265

農書十二種序

然臣子と書者之日先王為民興利除害無謂與
利者利也而除害林也害者老也夫
先王興利除害之其政也載在干典籍者
至矣書矣何家後人之也而乎唯乎以法必不
得而待耕耨之初事也然則耕耨之固也
不研究精討之矣予と友大藏永常系能乃祖
志夙潜心於此道七十年如一日遂游于四方以



由臣書十二種序
大藏永常

以老為吾不如老圃也老者老圃反邪謂吾不
 如龜翁欽翁姓大德氏名永者字季純休祿
 懷其術龜翁字紳也豐後日田郡人也後徙家
 于大阪焉為人少言浮美之事性沈默而者
 高思令氣久政而成初去又未于江戸一日過
 契舍為手書法一言因書之以為序云

秋田 奧山 撰



除蝗錄叙

國以民為本民以食為天無食斯無民無民
 斯無國是故先王之政以足食為其首務而
 力農為之要後之為政者可不盡心焉哉
 國家昇平二百有餘年億兆鼓腹於雍熙之
 化猗歟可謂盛矣然而水旱饑荒不能保時
 無之凡民之情必有所賴而後安有所望而
 後勸 國家救荒之政固亦無不備具而獨

於除蝗之方則或未之有講也不獨我邦為
然而雖漢土而亦炎火祈祝之外寥々乎未
聞別有其術也豈以其出於天者人力不能
勝之歟抑有其方而人未及知之歟豐後有
大藏龜翁者為人朴實夙篤志於農務每有
所聞見輒記錄之作農書若干種曩嘗得鯨
油除蝗之方試之西南地方見有效驗救民
不貲因今作斯編欲廣布之東北使天下遂
無蝗患嗚呼果謂人力不能勝天耶或者天
誘其衷乃爾雖如人力而竟出於天意者歟
昔唐時鱷魚為患韓愈作文以去之至於明
時鱷魚復為患而夏原吉則沈礮灰以去之
一感以誠一謀以智然其祛患也均矣夫其
出於誠感者不能學之而至於智術則苟遵
其方人々可學而能之也今龜翁除蝗之術
謂之原吉之智可也我邦亘古所無而今有

之漢土所未知而今得之遂能使天下無復蝗患則其功豈翅去一鱣魚之比云哉翁之斯書雖曰蕞爾其於國家勸農足食之政庶幾乎有所裨益也及其丐言余樂叙而道之

文政丙戌三月盡

江都一齋老人佐藤坦叙



除蝗錄 全

物論

大藏永常著

夫氣候不順有時ハ穰一蝗生一害成多クモハ
此如ク是下ノ一大患アリ種々バ農家増々汚ノ
方と云フモ人ハ皆一ツバ先禄ハ頃近ハ西園也
是代々々々事ハ其ノハ増生トシテ年々ハハ
人集リテ大食何モク照一後大穀と云リして田乃
以疎を巡家より外ノ人ト云フ道と云フクニ其伎國

除蝗錄 大藏永常著

猪民の書も増上心へ増上進上方向れども大排
 前文乃可意工過するの之享保十七壬子年増上心
 亦事甚しく諸國乃農家是成意よと之いひ
 んとも是き中より一々如人並に筑前云々五郡
 ハ尋氏某我屋敷乃うち安置し乃其菅朝之指て
 増上除久し御行の或夕御燈と捧むるに増上心
 群て燈の油工飛入て死に是と見て油乃増上大敵
 乃其心付申し油工飛入てきて武に須更ふし
 燈の死も事夥し夫より昼夜精力と盡し
 油工用ふるに後復し其田実る事と得たり
 實に聖神乃冥助ありと信し其物して事の本
 を書述されし書中より申之是と考ふに油乃増上除
 事其後ゆたり唯この油も又餘油其功の速く
 且もくハたし物ねども其に未餘油の速功ありハ
 其方よりより一々如人並に筑前云々五郡
 乃其年其冬を其く其候より

猪民の書も増上心へ増上進上方向れども大排
 前文乃可意工過するの之享保十七壬子年増上心
 亦事甚しく諸國乃農家是成意よと之いひ
 んとも是き中より一々如人並に筑前云々五郡
 ハ尋氏某我屋敷乃うち安置し乃其菅朝之指て
 増上除久し御行の或夕御燈と捧むるに増上心
 群て燈の油工飛入て死に是と見て油乃増上大敵
 乃其心付申し油工飛入てきて武に須更ふし
 燈の死も事夥し夫より昼夜精力と盡し
 油工用ふるに後復し其田実る事と得たり
 實に聖神乃冥助ありと信し其物して事の本
 を書述されし書中より申之是と考ふに油乃増上除
 事其後ゆたり唯この油も又餘油其功の速く
 且もくハたし物ねども其に未餘油の速功ありハ
 其方よりより一々如人並に筑前云々五郡
 乃其年其冬を其く其候より

子年より卯り其雨去げく其後去むく照又二月未ふ
 同五月の下旬迄霖雨昼夜成らるるは六月初旬より雨や
 むとつどり氣候陰冷よして暑うけく又中旬ふり
 て白雨をくつり其後より地生じ稲乃其後食枯
 ぬ於是諸國一統為化して飢饉よぶる不食身
 次は農民へら急すそのもの如く此の如く書
 傳りり古老の口碑もも伝て種も中々浚るは日九
 あり其の後天の三突卯年同七丁未乃すく乙卯ふ吹

小しそ諸國又為作よふ其頃へ未君出歳めて生國
 豊後日田より一が冬より春よけて俄よふひさ
 少い果はは窮民多し我組又そのの保く然直
 阿つれと富高乃家毎一人教をよりほけ粥よりを奉
 かせある事代見乃ひぬを後かし其の不作の事
 此年程の不作ありは年中文化より文政七
 の方ハ其年亦後其民教腹して大平とりたへ
 其よりつりがされ御代なりとふは此年乙酉の事

八畿内より夏来乃皆夜燈多く生す。東海道筋の
 折交り一時に帝を別よりて以田更其具はしといへ
 ともいへせん。練油乃正まらざる事以福實集しと有
 し。先づ菜種油を以て燈を点す。此は北方人より
 引ひてせらるるも其功練油より方よりぬき一連上へ
 たり。と云ふ大井川乃をさるる上新田村に宿り
 其の真前の養た。と見て早くも燈生し。たはるる
 其田代らよりけ其内燈乃多き。田へ菜種油多し

五度入燈乃くんと田へ油を以て交入燈の如き。田へ
 かし。ゆい。と。ひ。て。候。り。と。燈。を。点。て。油。を。ぬ。く。い。ま。た。田
 へ七八歩の依り。燈乃く。ゆい。と。油。を。上。入。た。田。へ。四。人。力
 の依り。と。り。燈。を。点。て。油。を。ぬ。く。田。へ。福。實。集。く。折。燈。と
 たり。し。と。其。人。修。り。と。は。家。も。予。も。燈。を。見。り。と。其。實
 其。其。言。の。妙。と。あり。と。嗚。呼。け。時。小。ち。つ。つ。と。練。油。乃。備。あ
 ら。い。と。せ。う。か。つ。燈。乃。く。と。し。の。音。と。と。と。嘆。息。と。な。れ。た
 甲斐。と。一。予。は。く。先。年。豊。後。と。り。尾。形。氏。と。り。豊。後。と。り

問云 志うく人並辰書小再三耕して干玉をくしりて返
うすふ花

答曰 耕へたのからく止まらん種もも大粒なり

まよふよりて雨雪常帯道の通りは時候をんがそ

耕して土は干りり年あそきま子の如く合るる

すくねさそく其心得をうすりて

問云 去秋より今春迄雨寒く冬寒く春も寒く

けき水も枯れ圃を土乃干きたるありてころは方よす

右籾の如く堆乃生れりて理ふおてたも有りて種は

深田は始終水河もよかや時ふりて又よきも堆生したる

はらひの理ちる也

答曰 不慮心の事うり堆の生れりて右中籾ん

はらひくそ年乃氣候よりり恰も時獲のくくを

まはひ深田も其くりの時獲ふ傳傳して堆生は

ちり堆生ども其毒をり制をまは止事いそや

泥地或ハ殺除の塩水もりの常事ふも堆取る田

小の年 初と増害乃多れと云て
 問云 論のいづくも
 先 年乃地くまるとも
 うききや

答曰 或農丈今年田土の平たなる成増害何ん
 事成事成と量つる春田荒れ年而已よて再耕せ
 ば麦ぬも荒れ年のとあて再耕せん一雨成倍は
 手敷のり耕しと苗を植たる人あり日陰乃田ハ増害

て再云油令近其田の害多く必極まりなり少く増え
 けきハ増て油はいさき増の増なりれば昂時
 退き一とて復五六日ふして又生ハ害成るん終ハ
 見ざるれども後のふせざる高を油入増え
 ての増極も倍は比もれば十が一もあり
 或人曰 増の年ハ麦吹乃田なる水増初て年一死とを
 〇増年増見ハ増も見身ひて油之口合能三三能入
 あり又早乃中一ハ水増置一もれば倍極の多増之
 の油價は倍はるんは利あり

隆興録

書目録

仇愷もろくまじし之り夫人の然ハ親小おくと妻女子元
 身小死しむる程のちまらとハつじ保一乞ハ私り之
 世間の身一くは患ハ煙乃生ゆるまへ一移ハ農
 小ては各救悟カ成車一則命小久煙せよ之之を
 見よ一中なるハ移走ハ疾る子に良善成何き之に
 死よいたろくむるよ似きり只今一華そ煙乃成去
 ぢふも先よ除去ろく

煙の種別

具原翁の大和を京に頓騰身取賊の四生成煙とよイナゴ
 のれらりし何れがも移よ舟中ハ救生何りと見し其国を
 名りり又かの里たる中何れ一是成せんまも小海あ
 まハ及母子何れも一成也

螟

農桑の集解で成るをパイナゴより心を入ると何れ元イナ
 移成害しむる心の上非は移も莖も人にも移成初てす
 あり死とそえゆ

騰

俗小の實盛す之莖葉の多成吸て害とらる之移ろ六松の上
 てたれろく又沖おて除べ

純真油しんしんあぶらをしん見み分わかりし純真油しんしんあぶらのしん石いし之し
 へまままのしん田いり子こ純油しんあぶら五ご合が入いてま煮にてま純真油しんしんあぶらのしん石いしもま其その味あじを
 入いればまま乃すなは純油しんあぶら此こ切きれば及およぶべいい直しん類るいとまくくふふれればばおおろろし
 ともも入いてまふふ小こ徳とく車くるまゆゆりり○直しんのしん純油しんあぶら乃すなは直しん後ごへへ四よ斗と樽づん入いれ
 てま銀ぎん百ひゃく目もく前まへ後ごよりりそそ升しやう名な銀ぎん或ある或あるのの石いし○九く列りつ小こ樽づんもも
 車くるまのの石いしををふふいい赤あか古こ房ぼうをを直しん實じつははくく以もても車くるまををふふれればば其その肉にく内うち
 ををままめても銀ぎん百ひゃく五ご拾しゆ月げつ内うち外そと小こ直しん上じやうよりりそそををままめても裁さい肉にく内うちのの石いしをを
 純油しんあぶらのの直しん上じやうよりりままてて西さい國こく乃すなは壇だん石いしととままくく車くるま之し○綿わた接せつのの油あぶら

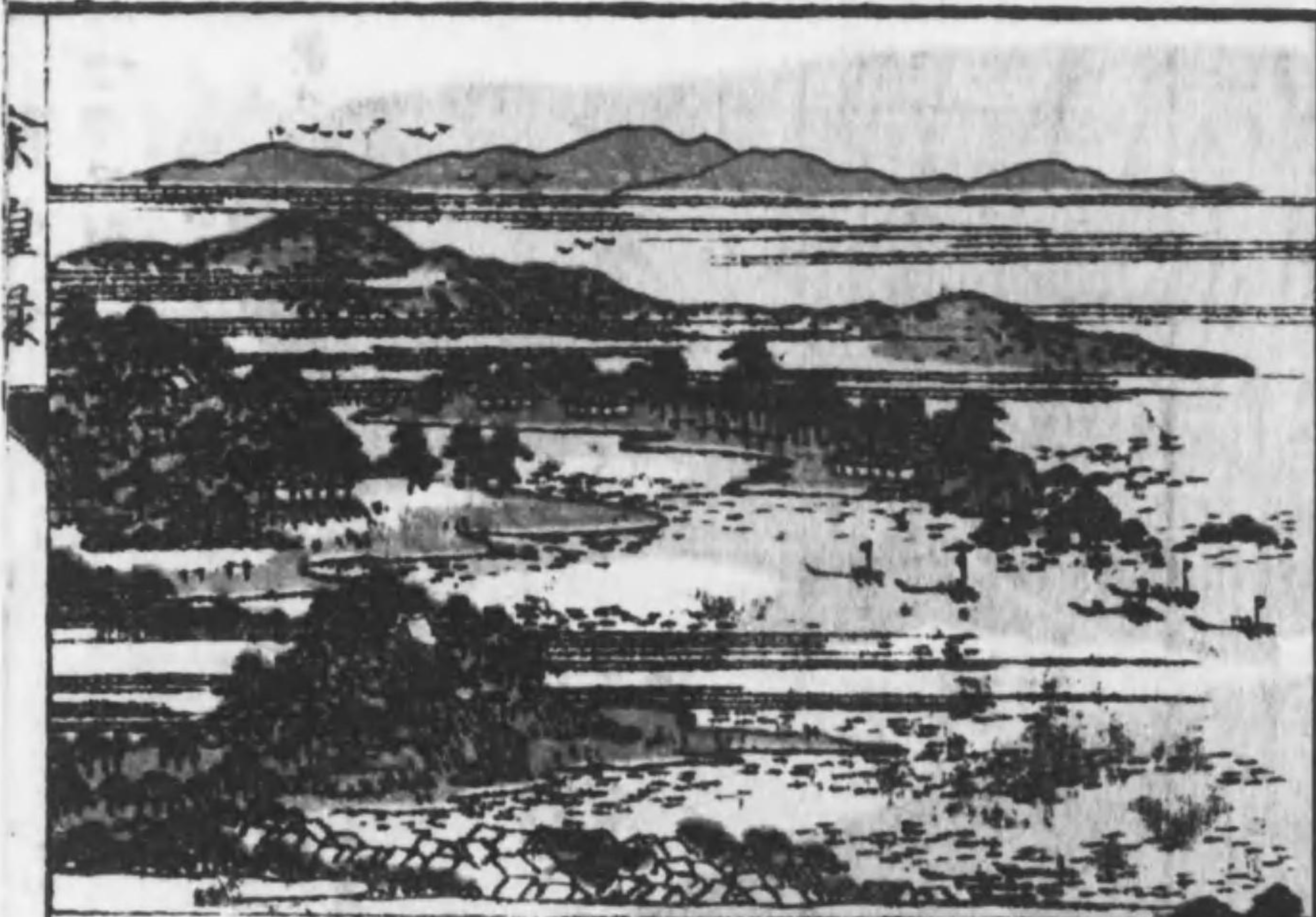
乃すなは赤あかととるるししととてて絞しぼりりたたまま黒くろ色いろのの油あぶら 菜さい種しゆ子こ油あぶら乃すなは直しん後ごよりり
らトト妙めうををろろししのの原げん油あぶらをを純油しんあぶら内うち中ちゆうよりり入いてま煮にてま車くるまゆゆりり江え州しゆう載ざい
を作さくしし月げつををままてて下げ直しんをを純油しんあぶら内うち中ちゆうよりり入いてま煮にてま車くるまゆゆりり江え州しゆう載ざい
見るるままままのの石いしををままめても絞しぼりりたたまま黒くろ色いろのの油あぶら 菜さい種しゆ子こ油あぶら乃すなは直しん後ごよりり
前若まへ若まへ丸まる石いしををままめても絞しぼりりたたまま黒くろ色いろのの油あぶら 菜さい種しゆ子こ油あぶら乃すなは直しん後ごよりり
多くく増ま生せいトトなな耐たいハハ此こ油あぶら内うち中ちゆうよりり入いてま煮にてま車くるまゆゆりり又またハハ菜さい種しゆ子こ油あぶらとと
死方はた地ぢののししりりとと油あぶらののししりり小こ入いるる車くるまゆゆりり又またハハ菜さい種しゆ子こ油あぶらとと
入るるままりり純油しんあぶら内うち中ちゆうよりり入いてま煮にてま車くるまゆゆりり又またハハ菜さい種しゆ子こ油あぶらとと
油上じやうまままま後ごへへ石いしの本ほんもも花はな葉えにに虫むしのの身みたた耐たい純油しんあぶらををまま
まへへ小こををたたしし中ちゆう乃すなは竹たけ子こををままてて入いれればば中ちゆうたたららちちううらら死しす

鯨之品類

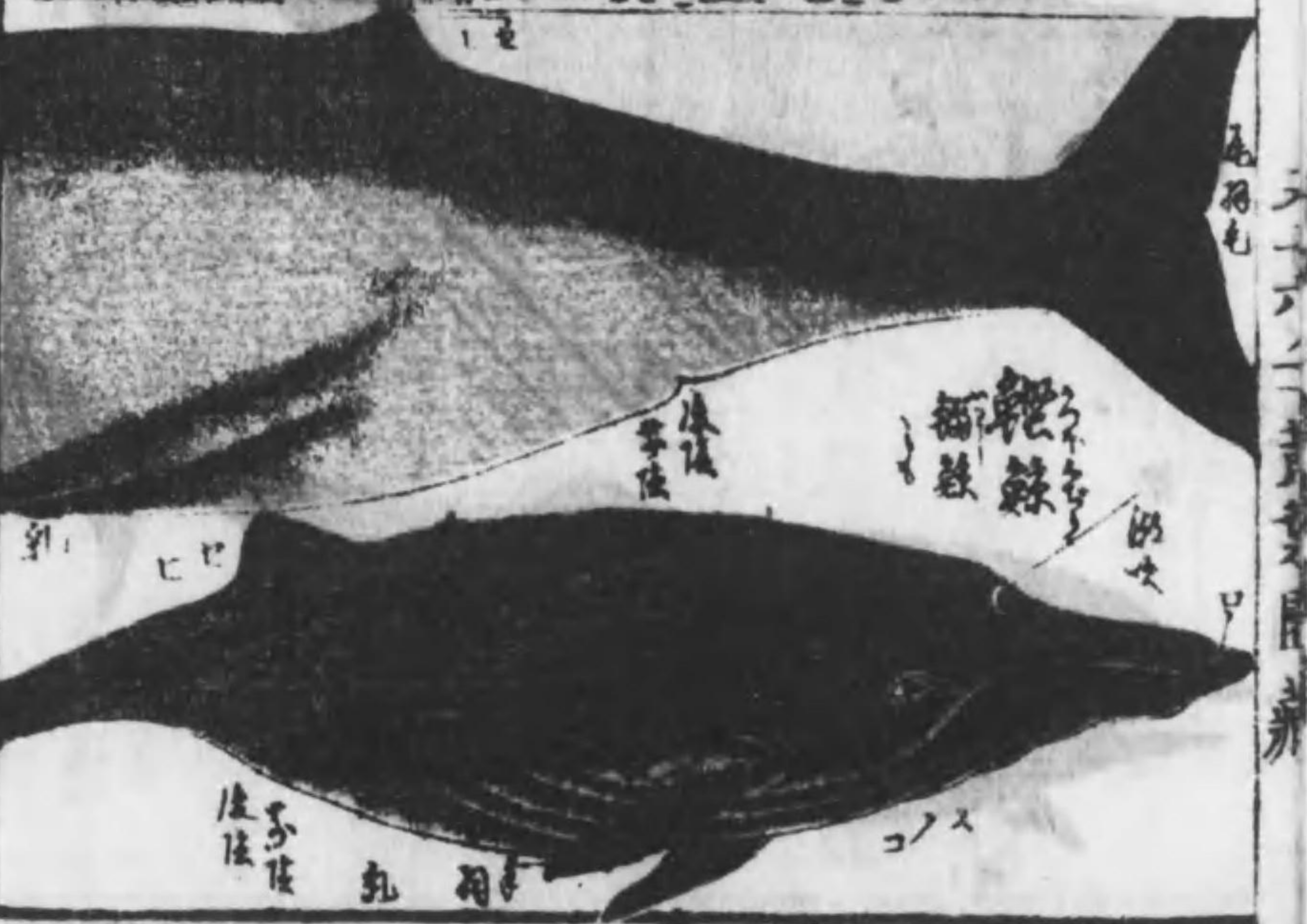


層仔あり或ハ水母和して漆をくくくげハ猪乃虫出く
 死に程中に歌は之を鯨小五種六品有り春見ニ壁頭
 長須 白長須 兒鯨 青サギ 鯨鯨 又サガヲ 五種ハ須ハ真甲鯨
 提鯨 赤坊鯨 サカマタ ニヤチニヤチホコ コト鯨 赤コト ナイコト
 鯨等の種あり其月用いて功ある油有り鯨魚油の
 鯨鯨 鮫乃油 家来一 鮫ら鯨魚油ハ濁りてくくく一 正馬乃
 鯨油ハ清くふしてくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 此ハ鯨程の換徳有り是ハ真ノ油見えてくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

余皇録
 又十六ノ一 黄葉園補



把志の
小島
平戸
行
無
同



潮吹

長須鯨
十五尋之

手羽

尾羽毛

鯨鯨
鯨鯨

尾羽毛
鯨鯨

コノス

長須鯨

長須鯨

長須鯨

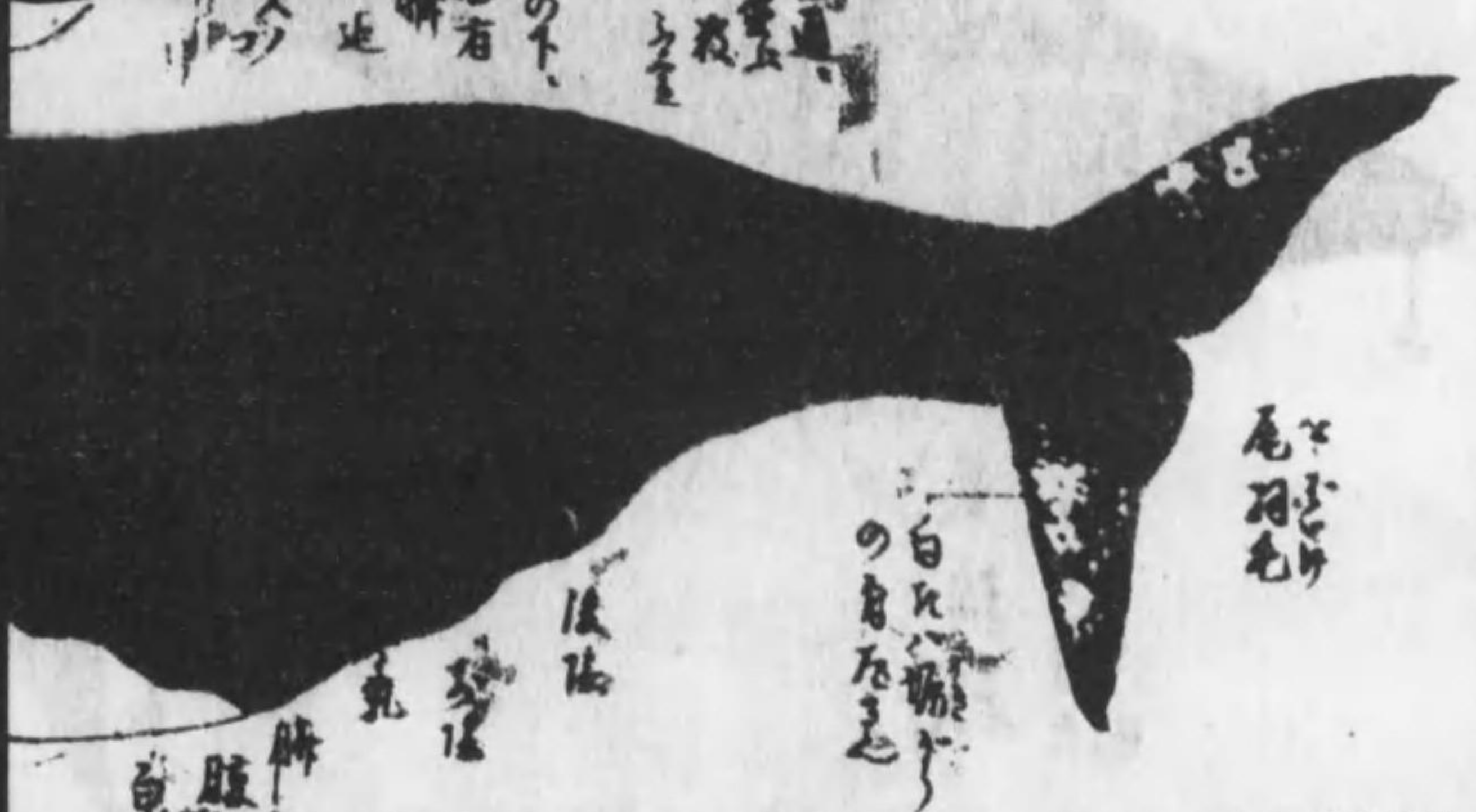
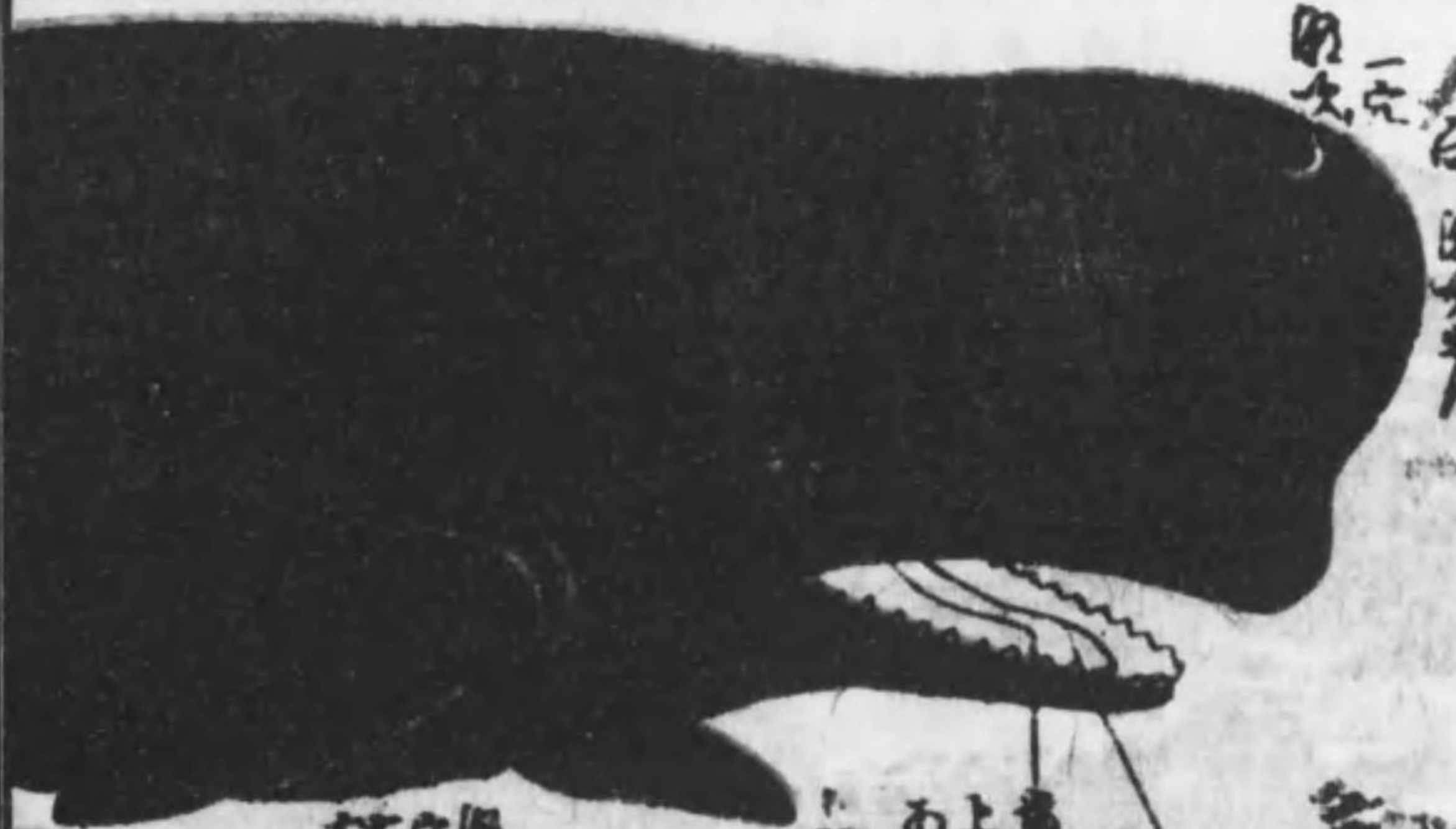
長須鯨

二ツコ鯨
白の因女大

産頭結
七尋の團

尾羽毛

白の因女大
の白たき



尾羽毛

セ

産頭結
七尋の團

右

尾羽毛

背美鯨
七尋の團

眼の
まぶた

尾羽毛

二六三

田子油取いり方

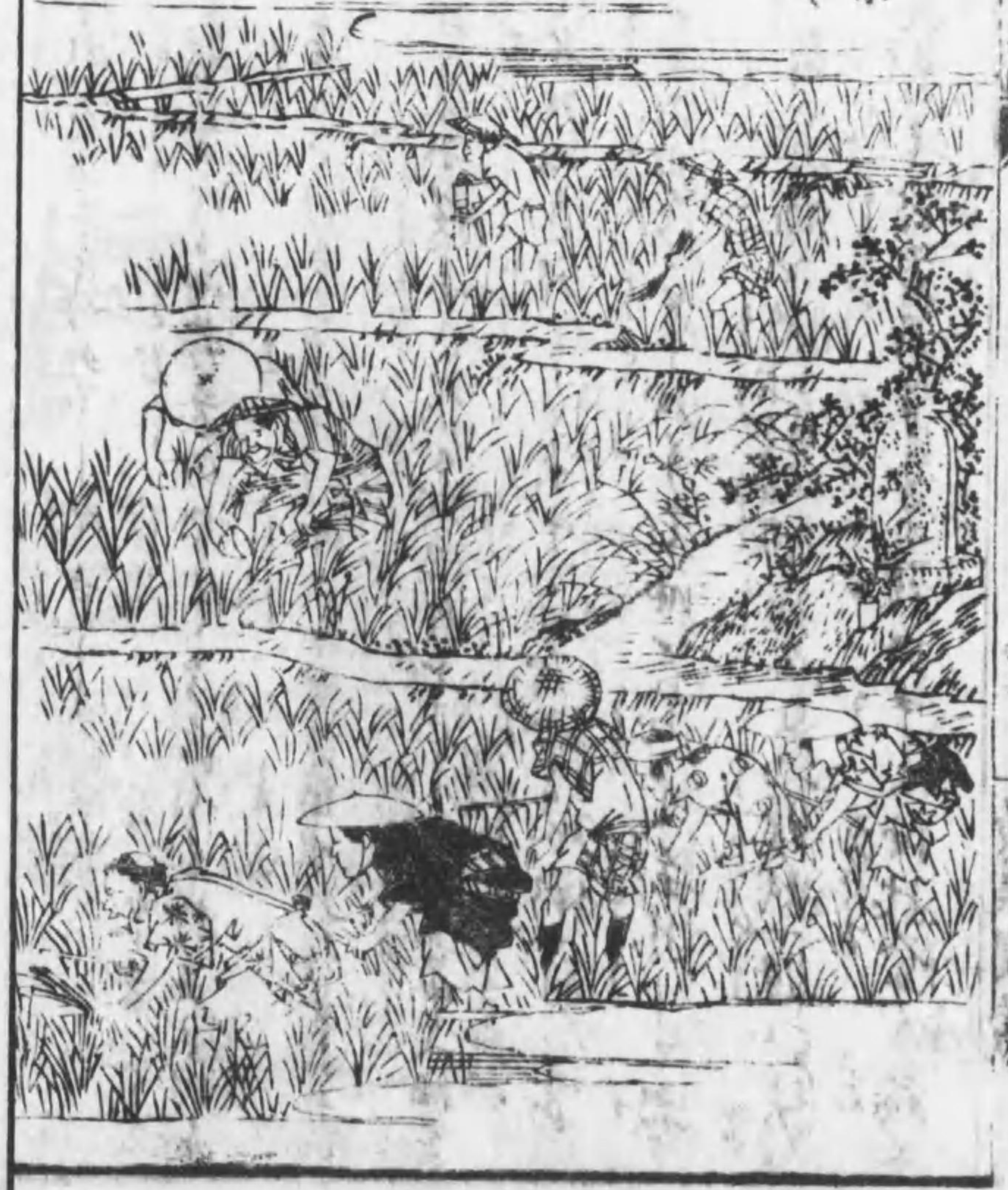
先田に油取いり入るは層の口つ時より八ツ半時迄乃
 うち日勢けよく田水の湯乃如く暖みよりきり時水ト
 取せよと先睡一をいふも成たる先上田のころれきふ
 油を入りのもみ授右れもめて規の七さお一をひすくハ
 て一坪より七坪入てとまハ油ハ一面にむて海と入其のより入
 葉の曲たさとりて水をうりくまがてまゆ一油と取して結
 乃中へ入るやうみしてけり一吹より又まて入るは作をりて



竹の角
沖へ入り水
中へ入り水
うき

油を入れ
油をいれ
油をいれ
油をいれ

油をいれ
油をいれ
油をいれ
油をいれ



て水せすくひをそりへーむぬぬへ入るるれへ馬ゆふ
まぢくびてゆへー又敷十人同く唐行みぢくび右の
に長サ武尺後の竹せりてたり乃ち上同く福株せり
りち右れち小村をり竹みて株をたきさて竹灰水中みた
れ着して向へゆへー株して翌日ハきりたきり竹をたき
と見て株をゆへへ先づ古水せりー又新水たきえき日乃
如くもてー四五度もゆへせりれハ去去せりー二をがぬ
そくたてハ去がせりれハのへ

たり 稻の勢弱く 穂乃お小力なりて 宜し。○おとく
 入る 田の油多し 其のまじり 穂もよく あり 事
 あり 其故 形角丹識して 煙の除れ 事せし 油とつて 宜
 し けし へ 穂乃 玉人と 事 頃 入る 他 記し ありて 宜し
 稲若菜 ぼりの 其 付 陰 冷 なる ば 入る 事 する 事 穂 十
 分 入る 事 宜し 入る 事 宜し 入る 事 宜し 入る 事 宜し 入る 事 宜し
 て 穂の 玉 能し 害 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり
 事 あり 心 宜し 事 あり 事 あり

○ 小名の者 牛 地 宜し 甲に 令 他 事 あり 宜し 事 あり 事 あり
 地 宜し 沖 代 宜し 地 宜し 沖 代 宜し 地 宜し 沖 代 宜し 地 宜し 沖 代 宜し
 料 宜し 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり
 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり
 生 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり
 事 あり 富 農 宜し 必 備 油 乃 心 宜し 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり
 右 除 蝗 の 方 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり 事 あり

後仁宗御書云如く仲成りてふせさるる中
實も平一攻得たり是人多し仲の功終るは也
是の功後も増生はる時ハ方成用いあひる
事成る行しそぞにさるるも赤心も又むる
事成る行しそぞにさるるも赤心も又むる

文政九丙戌歲

加月 黄葉園藏



出雲寺文次郎

同寺田通松原下ル

勝村 治右衛門

大政心齋橋通北久太郎町

河内屋喜兵衛

同安堂寺町

秋田屋太右工門

東京横山町一丁目

出雲寺萬次郎

同日本橋通壹丁目

須原屋茂兵衛

同芝神明前

岡田屋嘉七

同馬喰町四丁目

吉田屋文三郎

書肆

終